

今回登ったアバチャ山は、標高はわずか2741mに過ぎないが、なんせ北極に近いカムチャッカにあるので、短い夏に高山植物が咲き乱れて大自然の奏でるメロディーが人々の心を魅了してやまない楽園である。



1. 最悪の体調

最初は散々であった。3月で定年退職したのだから、後は悠々自適の人生を送ればよいものを、組織に属していないと自分は世の中から見放されたと思ってしまう。確固たる自分というものを持ち合わせていない人間のだらしないところである。3ヶ月ほどしたときに“高橋さん、仕事しないかい”と声をかけてくれる人があった。即座に“ハイハイハイ”と手を挙げてしまった。30年やってきた自動制御技術の仕事ではあったが、得意の空調制御ではなく石油プラント関係である。何とかなるだろうくらいに考えていたが仕事を始めてすぐに、それぞれの分野で蓄積された技術の習得はそんなに簡単にはできそうにも無いことに気がついた。7月の下旬には8日間カムチャッカのアバチャ山へ行きますから、ということは就労条件に入れておいた。定年退職者を使うのであるから、その辺は大目に見てくれた。しかし強気に出た分だけ負の一面が大きかった。自分の心の中では、まだ仕事も把握していない人間がいきなり長期休暇をとるということに対して、ストレスとして増幅されていったのであろう。7月に入ると体調が悪くなった。毎日計っている血圧計の脈拍数が多い。普段から鍛えているので55~60が通常値であるのだが70前後の日が続いた。熱を測ると平熱の範囲であるが微熱があるようでだるく、朝起きると寝汗をかいている。さらに下痢が加わった。クソがクソの形になる前に出てしまう。その上小便の色まで黄色を超えてオレンジジュース色になった。さすがに今度のアバチャ山は止めようかとも考えた。やっと出発日の5日前くらいに脈拍が戻り始めた。次いでクソも腸の形を取り戻してきた。下痢をしたということは内臓が悪かったのであろう。内臓を痛めると気力がわかなくなるという。

アバチャ山へ登るには、ベースキャンプから頂上まで一日で1900mの高低差をこなさなければいけない。過去に私がこなした最大高低差は南アルプスの策が岳における1800mであるので、それをしのいでいるわけであり半端ではない。出発日の2日前に丹沢山へ登って予行練習をした。足がついたが何とかなった。ここでつらしておけば本番ではつらないはずだ。気力の衰えもなさそうである。体力的に劣る俺が気力を失ったのでは話にならない。

2. 旅の始まり

カムチャッカへは新潟空港から出国する。新潟からはわずか80分でウラジオストックへ渡り、国内便に乗り換えてペトロパブロスク・カムチャッキー市へは3時間あまりの飛行である。ロシア製のツボレフ機はかなりちやちな飛行機である。ロシア製品は何でも頑丈に作ってあるというイメージは最初から覆された。しかしロシア官僚主義は健在であった。ウラジオでの荷物チェックは厳格極まりない。預け入れ荷物と機内持ち込み荷物の両方の加算値で計量され、20kgを超えると課徴金を取られる。ほかの国でも建前は同じであるが、実際は“まあまあ”で済まされてしまうし機内持ち込み荷物まで計ることはしない。何人かが超過料金を支払った。カムチャッキーの飛行場からはこれから目指すアバチャ山が遠望できる。写真を撮ろうとすると、大きなロシア人が近づいてくる。ちょうどいいからシャッターを押してもらって記念写真にしようと思ったが甘かった。飛行場内で写真を撮ろうとしたことをやめさせに来たのだった。ここはロシアなのだ“オー、こわ”。それにしても夜10時近くになってもまだあたりは薄明るい。北極に近いのである。

ツアーのメンバー構成は男3人、女11人である。私以外の男は67歳ということで、61歳の私は男の中ではいつも通りに最年少ということになる。しかし女性はもう少し若



写真 1 改造四駆車と泥んこ道

そうなのは何人かはいるが、ピチピチギャルというわけにはいかない。

翌朝はもうアバチャ山のベースキャンプへの移動である。ホテルにはタイヤのお化けのような四輪駆動の改造車が迎えに来ている。なぜこのような大げさな車が必要とされるのかはアバチャ山に近づくとすぐに理解できた。道とはいえないような道を走っているのである。川が作った森ではない部分、とでも表現したっていいのではないか。さらに上のほうへ登っていくと雪の上を走っている。ツボレフの飛行機はチャチだったけれども、こいつはやっぱりロシアだ。ロシア人の観光ガイドであり日本への1年間の留学経験もあるというジェーニャ君も、もう一人のロシア人観光ガイドと一緒に改造四駆車に乗り込んでいた。ジェーニャ君は東洋系の顔をして（韓国系か日本系か？）日常会話は日本語で十分対応できる。

アバチャ山ベースキャンプは山岳基地というよりも、始まったばかりの建築工事現場という感じである。宿舎も食堂棟もプレハブである。とんがり帽子屋根の山小屋といった趣はない。中に入ればそれなりに快適であるが、外観は気にしないところもロシア的であるのかもしれない。強風が吹き付けることが無いのでこんな形状の建物でいいのかなと思うが、ほんとかどうかはわからない。冬にはかなりの雪が積もるはずだから、こんな形状では不利なはずだ。おそらく登山シーズン後は建物を分解して片付けてしまうと思われ、これが正解であろう。こういうやり方もひとつの見識かもしれない。山小屋だからとんがり屋根と決め付けるほうがおかしい。



写真 2 アバチャ山ベースキャンプ

すぐ後ろにアバチャ山が控え、アバチャ山より 500m ほど高く富士山型をしたコリヤーク山も近くに迫っている。

3. らくだ山ハイキング

午後からは翌日のアバチャ山へのアタックへの予行演習として近くのらくだ山へのハイキングを行う。文字通りらくだを思わせる山容をしていてわずか 1 200m の山であるので、ベースキャンプからの標高差は 400m に過ぎない。しかし歩き始めると身体がだるく熱っぽい。雪渓を詰めているときには息も上がってきた。出発前の体調不良が直りきっていないので、気候をはじめとする諸々の環境変化への対応ができなかったようである。しかしそんな分析はどうしてもよいことで、明日登るために何をなすべきかだけに集中しなければならない。同室で自称アル中の高崎さんからの“一杯やろうよ”の誘いには返事をしないで、厚着をしてシュラフにもぐり込んだ。学生時代に山へ行く前日まで扁桃腺を腫らして高熱があったが、当日の朝にびっしょり汗をかいて治ってしまったことがある。そのときの再現を期すしか頼るものはない。でもあのときから 40 年経っている。還暦も過ぎた人間の取る手段ではないことは分かっているが、物事を冷静に対処することだけが総てではない。・・・などと偉そうにいうほどのことでもない、行きがかりに流されただけである。



写真 3 らくだ山

4. アバチャ山登山

翌朝、シュラフはシットリとぬれていた。高熱が出たわけではないので、ビショリというほどにはならなかった。ともかく汗をかいたということはいい兆候である。一点の光明は見えた。食欲はなかったが朝飯は無理に詰め込んだ。山登りに空腹は最大の敵である。

西洋人の設定する登山コースは、登頂日にはヘッドランプを使って夜中から登り始めるような行程を組むことが多いが、朝 8 時からのスタートということでもかなり遅い。なにしろ夜の 11 時近くまで日が暮れないのであるから、夜 8 時に帰り着くような行程としてもアブノーマルなものでない。

スタートすると身体は軽い。だるさもない。先頭を務めるロシア人山岳ガイドのペースは長い行程を意識してゆっくりである。ありがたいことだ。(このツアーでは 2 種類のガイドがいた。ジェーニャ君は観光ガイドで、山登りも含めてわれわれの行動すべてに付き合った。山岳ガイドはアバチャ山専門である。後で行ったバチェカズヅェエ山麓のハイキングにはその山岳ガイドがいた。) わたしは、日本で一人の山のときなどは 50 分歩いて 10 分休むペースをしっかりと守るようにしている。しかし海外登山などのようなツアーに参加したときには、ツアーリーダーに任せるほかに選択肢はないのであるから、時計さえ見ることもしない。このときもすべてをツアーリーダー任せにして歩いたが、休憩の間隔が長めであることぐらひは気がついた。1 時間以上休まずに平気で歩く。アバチャ山の中腹であり、ここから山頂まで直登となる 2 000m の丘へ出るまでの標高差 1 200m の登りに対してきちんとした休みは 2 回しかとらなかった。この中腹での休憩は 40 分ほどの時間を取って昼食タイムになった。事前に配られていた昼食を食うことはもとより、持参のゼリーやチーズも休み時間ごとにこまめに食った。“空腹は山登りに敵”という学生時代からの信念を、特に今回は貫いた。こまでは昨日のらくだ山のように息が切れるようなことはなかった。残りの 700m 余りの登りはかなりの急傾斜であるが、過去の経験が何とかしてくれるはずであるという自信が湧いてきた。登りはきつかったが、それを体調不良のせいにしてしまうというネガティブな意識は湧かなかった。これだけの急傾斜なら誰だってきついのは当たり前である。しかしほかのメンバーで遅れる人は出てこない。さすがにロシアくんだりまで山登りに来ようというつわものぞろいである。途中雪渓を渡るころがあったが、用意したアイゼンを使うほどのことはなく快調に進む。



写真 4 アバチャ山の急な登り

狭山さんは“家では孫からクソ婆といわれている”などと嘆くが、水泳はやる、テニスはやるというし、山の歩き方もバランスがよく、こんなに何でもできたら周りの人間は立場が無くなって、憎まれ口のひとつも言いたくなるのもなんとなくわかる。ちっちゃなババアのくせに、こんなきつい登りでも近所の八百屋へ買い物に行くくらいの感じで息ひとつ切らずでもなく登っている。アニメ声でしゃべるのが特徴の川口さんは、結構へばっているようであるがその特徴あるアニメ声でよくしゃべる。何とか遅れないでついてこられるのは、よくしゃべることがきついとか疲れたということのを忘れさせてしまっているからなのかもしれない。今回のメンバーの中では一番若いと思われる緑さんは、ときどき遅れるような感じがするのでばてたのかなと思うとしぶとくついてくる。普段から少しくらい離れても気にせずにマイペースの歩き方をするのであろう。ツアーリーダーが食事のときに、“ビールの方！”と声をかけると、真っ先に“ハイ”と元気に手を挙げる。海外旅行慣れたメンバーが多い中であってこの手の旅には慣れていないようで一見シャイに見えるが旅慣れてきたらほかのおばさんたちのようになるであろう。

しばらく登ると、先に登っていたロシア人の登山者が次々と下ってきた。若い人が多い。みんな元気である。ざらざらの道を走るようにして下って行く。ロシア人も結構山好きが多いみたいだ。ジェーニャ君もそうであるがここではアーミースタイルの軍服を着たロシア人が多い。ジェーニャ君に聞いたところ兵役のときにもらったものであるという。昼食をとった中腹から3時間経つか経たないうちに、ついに頂上についた。ジェーニャ君たちとコリャーク山をバックに記念写真を撮る。みんなが個別に彼らと記念写真に納まろうとするので、彼らは大忙しのスター並みである。富士山型をしたコリャーク山は、アバチャ山の頂上から見るとより優美に見える。アバチャ山は活火山であり、ところどころから噴煙も上がっている。日本だったら登山禁止になるような山なのかもしれない。火口の周りを半周する。昨日は雨交じりの天気でその姿を現すことも少なかったが、今日は晴れ上がって十分に周りの景色を堪能させてくれる。すでに3時を回っているのにこんなにゆっくりしていて良いのかと思うが、何せここはカムチャッカである。10時までに帰れば暗くならないのであるから気楽である。肝っ玉おばさん風の八王子さんはちょっとの休みのときでも、はがきサイズのスケッチ用紙を取り出して筆ペンを使ったスケッチにいそしむ。早書きが得意らしく時間の少ないことなんかちっとも苦にしないようである。ツアーリーダーに対して、“描いている途中だからといってスタート時間を遠慮しなくて良いですよ”と声をかけている。人が覗き込もうが筆のスピードには変化がない。良いとこの奥様風の日野さんとは地元勤労者山岳会で一緒らしく、二人でよく海外の山へも行くらしい。ツアーリーダーの田中さんと歩きながら槍ヶ岳の北鎌尾根だとか北岳のバットレスなど岩登りの話を熱



写真 5 アバチャ山頂上からコリャーク山を見る



写真 6 アバチャ山頂上火口付近



写真 7 アバチャ山を中腹からふりかえる

心にしている。やっぱり肝っ玉おばさんだ。

さすがにいつまでもゆっくりしているわけにもいかないのので下りにかかる。先ほどロシア人の若い人たちが走り降りていったざらざら道をスローなペースで下る。最近下りを苦手としている私としては歓迎である。昼食をとった中腹を過ぎると、登りとはコースを変えて急傾斜の早道を取る。最後は雪渓を下る。登山コースはなるべく雪のあるところを避けてつけられていたので、子供のように嬉々として下りる。雪渓の傾斜はさほどきつくないので、間違っただけで怪我することもなさそうだ。

5. アバチャ山の高山植物

北海道でもそうであるが北国の夏が短い土地では、高山植物はその短い夏の間いっぱい咲くので、その時期に行けばたくさんの高山植物に遭遇することができる。ましてやここはカムチャッカ。たくさんの高山植物も半端ではない。このツアーに参加した人たちも“自分認定：花博士”が多い。西東京方面に住む4人組は地元の山岳会でのお友達みたいで一様に花に詳しい。三鷹さん国分寺さんは姓こそ違いが姉妹とのこと。中でも東村山さんはピカイチの花知りだ。さりげなくかつ断定的に花の名を呼ぶ姿が印象的だ。私がチングルマだと思った花を、これはチョウノスケ草という。葉っぱの周りにぎざぎざがあるのはチョウノスケ草であるとの説明をしてくれる。チョウノスケ草①もチングルマ②も最初は白い花が咲き、花びらが落ちるとひげのようなものが出て③、2度楽しませてくれるのが特徴である。

(ちなみに帰ってから植物図鑑で調べたら、チョウノスケ草は花びらが8枚、チングルマは花びらが5枚と、もっと分かりやすい違いがあった) 東京都さんを含めて、花を語るときの4人組は実に生き生きとしてにぎやかだ。常陸那珂さん御夫妻も花にはうるさい。特に旦那の方は実にこまめにデジカメへ花の収納を行う。いい写真をとる人は被写体に向かうときに骨惜しみをしない。後で分ったことであるが常陸那珂さんはホームページを



写真 8 チョウノスケ草とチングルマ

を持っていて、その中で山の写真をたくさん紹介している。(「山で遊ぼう」「茨城県」で検索すればすぐにわかる) やはり発表する場所があるから、より良い写真を撮ろうという気になるのであろう。発展的な感じの奥さんとおとなしいイメージの旦那であるのでカカア殿下と思ったら、小さな声ながら旦那の命令口調のほうが強い。旦那の定年退職前は車の運転は常に奥さんでゴルフも奥さんしかやらなかったのが、今では運転も旦那が中心で遅く始めたゴルフもスコアは80台であるという。なんでもその気になればすぐにこなしてしまおうという人もいるもんだ。今では茨城県の山岳会の会長も務めているということであるが、たぶん定年前の社会的地位もけっこう高かったのであろう。



写真 9 アバチャ山の花々

山から下りたら体調もだいぶ良くなって、夜は毎夜アル中の高崎さんとの宴会になった。定員8人のプレハブ小屋は、さらに4人ずつの部屋二つに分かれている。男3人と女性4人が同じプレハブ小屋になった。常陸那珂さんはお酒には興味がないようで、高崎さんと私が飲んで与太をあげていても、余計な口を挟むこともしないし逆にうるさがるような無粋な態度もとらない。高崎さんは海外国内含めて山行経歴もかなり多そうな人である。海外で私の行ったところは大体登っている。国内はいつも一人で登ることが多く、人のあまり行かないところを好んで歩くという。最近国内の山でも旅行会社の企画にすぐ乗ってしまっている私からすると、この年上ジジイの行動力はなんともうらやましい。その行動力で隣の部屋のおばさんたちも男の部屋へ呼び込んで宴会を盛り上げようとした。しかし彼女らは夕食時のビールくらいは飲む人はいても、ジイサマのしつこい酒にまで付き合おうというほどの物好きではなかった。私が酔った挙句に山の話に熱中する高崎さんに飽きてきて「熊野古道の修験道者の話」になったときに、神社といえば“小泉首相の靖国神社参拝は賛成だよ”などと話をはずしたら、一生懸命にもとの話題へ戻されてしまった。どうせ飲兵衛の話なんて、お互いに自分の言い分ばかり主張して相手の話なんて聞いていないということを知らないらしい。山好きというやつは妙なところでまじめなところがあってやりにくい。海外の山を好む人は大体同じようなところに行っているもので、話しているうちに高崎さん・常陸那珂さん御夫妻・八王子さん日野さんの勤労者山岳会仲間そして私が鈴木達夫という同じツアーリーダーに厄介になっていることがわかった。高崎さんはヒマラヤ、常陸那珂さんはキリマンジャロ、八王子さん日野さんは中国の四姑娘、私はついこの間の5月にペルーアンデスでお世話になっており、鈴木達夫さんを南米専門家と思っていた私は間違えて、結構行動範囲は広い。特に日野さんは四姑娘で高山病になり、かなり手間をかけさせたということである。

6. パチエカズエツエ山麓

アバチャ山の高山植物は種類こそ多かったが、この程度かと思わせるものがあった。日本でよく見る高山植物に対する私のイメージには、草の緑の上に白や黄色や紫の愛らしい花が咲いてい



写真 10 キンバイとフウロ草

るところにあると思込んでいるから違和感を持ったのであろう。火山灰地の上に咲いた高山植物は眼に優しさを与えてくれない。しかしアバチャ山からバチエカズエツエ山麓への移動中にそんな思いは一蹴された。一面のキンバイとフウロ草の花畑がずーっと続く。信濃キンバイだかミヤマキンバイだか判らないがとにかくキンバイだ。花博士の東村山さんもそれ以上のことは言わない。カムチャッカでは信濃もミヤマもあるはずがないということであろう。フウロ草も同じである。改造四駆車がどこまで走っても花畑が尽きることはない。われわれの泊まるテント村につくと、なんともったいないことに高山植物の上に無神経にもテントが張られている。これが日本だったら大騒ぎだ。このテント村は観光客が花を見に来るために作られたもので、ロシア人の花案内人がわれわれのグループも一回り花見物に連れて行ってくれた。シオガマ・クロユリ・チドリ・キンポウゲ・ツガザクラ・カキツバタなど実に多彩な花が眼を楽しませてくれる。中でも圧巻はアツモリ草である。びっしりと咲いている。やはり高山植物が売りである中国の四姑娘へ行ったときに、一つでも見つけると大騒ぎしたものであったが、ここでは最後には飽きてしまったほど見た。

数日前の夜の宴会のときに話しの出た鈴木達夫さんにみんなの便りを出そうということになっていたので、関係者の記念撮影をする。特にお世話になったという日野さんがその後のことはやってくれているだろう。

アバチャ山を登山の対象としか見ていなかった私はどうやら大きな間違いをしていたようで、カムチャッカへの夏の旅行というものはアバチャ山登頂よりもバチエカズエツエ山麓などを中心にしたフラワーウォッチングがここの一押し観光商品であることがわかった。事実アバチャ山には登らないツアー一行にも出会った。われわれのメンバーでも、唯一東京圏以外の名古屋から参加の千種さんは（今回のメンバーの最年長者？）、アバチャ山へは登らずにフラワーウォッチングのみを楽しんでいた。'02年に行ったパプアニューギニアでも、ウィルヘルム山の登山よりもその後の現地の自然のままの子供たちとの触れあいはるかに面白かったことと同様な感じを得た。

7. カムチャッカの生活

カムチャッカはロシアの外れとはいえ、やはり私がよく行くヒマラヤなどの未開国に比べると文化国家である。街にある商店など道路沿いの看板に英語がほとんどない。ロシア語で埋められている。私の数少ない先進国経験でもこれだけ英語が少ないところははじめてである。中国の上



写真 11 バチエカズエツエのテント村



写真 12 アツモリ草



写真 13 鈴木達夫クラブ

海や香港でさえもっと英語が多かったと思う。アメリカと世界2大強国を誇っていたときの名残であろうか。街の中心部にあるレーニン広場では、海軍記念日ということでパレードが行われていてたくさんの人が集まっていた。軍隊のパレードといっても厳しさはなく戦争のないことを誇るパフォーマンスにさえ見える。デコレーション的に鎮座している戦車の上には子供たちが戯れている。立ちすくむレーニンの像がどこか手持ち無沙汰に見える。

ペドロパブロフスク・カムチャッキーには一戸建ての家は少なく、公団アパート的な建物が多い。(なぜかロシアというとマンションと呼ぶよりもアパートといったほうが似合う気がする。)これも社会主義国であったための影響と思えるが、雪に埋もれるであろう冬のことを考えるとこの方がいいのかもしれない。日本のようにベランダというものはほとんど見ることがなく、その代わりにサンルームがついている。この土地を知るためには夏の明るいときだけにきたってだめなのだろうと考えさせられる。寒いときは厳しいんだろうなあ。

8. おわりに

最初に悩んだ、再開した仕事は帰ってからすぐに辞めた。ついこの間まで、“技術者は、自分が取り組んでいるテーマがどのようなシステムの上に成り立っているのかを理解しなければいけない。”と主張していた自分が、“中身はわからなくても良いですから計画と完成の書類作りだけをやして下さい。”という言葉に安易に乗ったことはやはりおかしかった。辞めたおかげで、この夏は山に登りつくそうとの思いは半ば達成された。北岳へ通じる4方向の稜線の中で唯一やっていなかった両俣コースをやったし、涸沢にテントを張って寝るといった目的も達成した。11月には再びエベレストを見るために1ヶ月間ネパールへ行くことも可能になった。こんなことやっていて何になるのだろうかという悩みは、本当にそのことに悩んだときのためにとっておこう。

オレンジジュース色の小便が白に戻ったのは帰ってからである。今はなんでもない。あのときの体調不良の原因は何だったのであろうか。わずか3ヶ月の浪人生活で完全な老後体質になってしまったのか。もしかしたらもうズーと前からそうになっていたことに自分が気付かなかっただけなのだろうか。まあそれでも良いや。とりあえず明日からは南アルプスの大無限山へ行き、その次の週は北アルプスの剣だ。いつになったら空白の人生に対する悩みに頭を占領されるのか。



写真 14 レーニン広場の賑わい



写真 15 サンルーム付のアパート